

5 マタイという人がいた。この福音書を書いたマタイである。ここで突然、福音書記者本人が、自分の証しを始める。私はイエスに呼ばれたのだ。自分で悔い改めたのではない。罪の中に座り込んでいたところから、主に呼ばれて立ち上がったのだ。まさにそこで私は甦ったのだ。

マルコ、ルカはこれを「徴税人レビ」の物語として伝える。元来「レビ」の物語であったことは間違いないだろう。しかしそれを読んだマタイは、「これこそ私の物語だ」と確信し、喜んでここに自分の名を書き入れた。そのように福音書が成立していったということは、私たちの心を燃え立たせないだろうか。私たちも、ここに自分の名を入れることができる。福音書とは、聖書とは、元来そのように読むべき書物である。

15 主イエスの招きが作る集まりを、10節では「イエスとその家で食事をしておられたとき」と表現する。「その家」とは何であろうか。マタイの家か。ルカによる福音書では（そしておそらくマルコによる福音書でも）徴税人レビ自身の家に主を招いたことになっている。しかしここではどうか。フランシスコ訳では「マタイの家」。しかし語学的には「イエスの家」ではないか。イエスが自分の家を所有していたのだろうか。しかし、たとえマタイの持ち家であったとしても、これはもう自分の家ではない、イエスの家として明け渡した。そしてそこにまた多くの罪人たちが集まっていた。ここに教会の姿を見る。

20 しかし、本当にそのことをしたときに、何が起こるのであろうか。ここで主イエスは、マタイを「病人」と呼び、「罪人」と呼んでおられる。わたしは正しい人を招いたのではない。罪人を招いたのだ。主イエスははっきりと、マタイを裁いておられる。マタイが自分で謙遜してそう言っているのではない。このマタイは、病気ののだ。罪という最悪の病にかかっているのだ。考えてみると、容赦ない裁きの言葉である。横で聞いていたマタイも、ああ、今自分は裁かれていると気づいたと思う。その裁きの言葉を、感謝しながら聴き取ったと思う。私の説教を聴く人びとは、この裁きの言葉を、感謝しながら聞いてくれるであろうか。

30 しかし、もっと重大な裁きの出来事が起こっている。ファリサイ派を始め、誰も予測しなかったような神の招きが出来事となった時、ここで誰よりも厳しく裁かれているのはファリサイ派であった。われわれもまた、今この言葉によって裁かれているのではないか。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではない」。こんな厳しい裁きの言葉はない。

35 案外われわれは、「わたしが来たのは、罪人を招くためだ」という主イエスの言葉を聞くとき、そうです、わたしこそその罪人です、と喜んで手を上げるのではないか。ということは、「わたしが来たのは正しい人を招くためではない」という主イエスの言葉を聞いても、ここで退けられているのは自分ではないと思ひこんでいるのではないか。

そのようなわれわれが、自分で謙遜して「私のような罪深い者が」などと言うことはあっても、他人から自分の罪を指摘されると、自分でも不思議なくらい反発するのではないか。あるいはまた、他人が罪を犯すとき、特にその他人の罪が、直接自分に被害をもたらすとき、たちまちわれわれもまたファリサイ派になるのではないか。

40 【当時のファリサイ派が具体的に待ち望んでいた救いがあった。罪人が裁かれること。義に生きる自

分たちが認められること。このような望みは、他人事ではないだろう。】

われわれは、本当に罪人になり切れているか。いやむしろ、主イエスに退けられている「正しい人」、それはわれわれのことではないか。そのわれわれが、ファリサイ派と共に裁かれているのではないか。このような裁きの厳しさを、説教で語りきることができるだろうか。

45

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である」。医者に出会って、癒されて、初めて気づく自分の罪。考えてみると、われわれが人の罪を指摘するとき、その指摘のしかたは、癒しをひとつも持たないことが多いのではないか。また逆に誰かに罪を指摘されても、癒してもらおう、わたしは癒してもらわなければならないのだ、という心になることは本当に難しい。

50

「包帯を巻く気がないのなら、人の傷口に触れるな」という三浦綾子の小説の中の一節を思い起こす。むしろ傷口に塩を塗るようなしかたで他人の非を責める誘惑を、誰もが知っている。まさにそれがファリサイ派の生き方であった。しかし主イエスは、罪を責めるためではなく、癒すために来られたのだ。

55

その「憐れみ」を学べと言われる。学ばなければならないのは、まさにわれわれが、ファリサイ派のごとく、罪を責めることは知っていても、癒す力を持たないからではないか。この「憐れみ」を知りもせず、学んでもいないことこそ、主イエスが見ておられるわれわれの悲惨であったのではないか。

主イエスはファリサイ派に、「だからお前たちはどっか行ってしまえ」と言われたのではない。「行って、学べ。神の求める憐れみを」と言われたのだ。あなたがたも自分の病に気づいてほしい。わたしの招きを受けてほしい。

60